

言語社会研究科 博士論文要旨

著 者 黄 馨儀
論文題目 台湾語表記論と植民地台湾 ―教会ローマ字と漢字から見る

本論文は、日本統治期台湾における、日本人の手になる台湾語表記の諸相を、西洋の宣教師や台湾人知識人たちの主張なども視野に入れつつ、総合的に把握しようとする試みである。各章の論点は以下のようになる。

第一章ではおよそ以下のことを論じた。

1. 『台湾教会公報』について

日本統治といった要素を視野にいれ、「ローマ字」が自由に発展できなかったことを論じる。日本の台湾統治に際し、台湾語表記問題が生じた。この問題を解決するには、西洋人がすでに作り上げた「ローマ字」をそのまま継承するわけにはいかない。植民地初期、伊澤修二は日本と台湾とは、漢字を共有しているという意味での「同文」であるという見地に立ち、日本人への台湾語教育では「ローマ字」を受け入れなかったと論じられている一方で、これまでの研究では教会傘下の「ローマ字」は自由に発達できたと思込みすぎている。本章では出版物の面から、主に『台湾新聞紙条例』と『台湾出版規則』といった法令と『台湾教会公報』の内容を手がかりに考察してきた。

張妙娟は、総督府の言語政策の強化に従い、『台湾教会公報』は使用言語の調整はしたもの、内容の自主規制は行わなかったため、「時事」の報道には影響がなかったとし、『台湾教会公報』の発展は台湾長老教会内部の変動と深く連動しており、清朝から日本への政権の交替によってある程度の影響は受けても、その基本精神と実質にまでは及んでいない、と結論付けている（『台湾府城教会報』と長老教会的基督徒教育』97-98頁）。2004年に、『台湾教会公報』が『台湾教会公報全覽』という題で復刻されたときに、張妙娟はその序文で上述の見方を繰返している。この主張も定説となっている。しかし、この主張はあまりにも台湾総督府の言論統制を甘く見すぎているのではないだろうかと思われる。

本章の考察を通し、『台湾教会公報』の「時事」掲載が植民地時代に入ってから縮小に向かった経過を、従来の研究はあまりにも看過していたのではないかということを描いた。要するに、『台湾教会公報』は植民地時代を通し、「報」すなわち「新聞」という名を冠してはいたが、日本統治の経過に伴い、実質的に「新聞」としての機能は失われていったことが明らかとなった。上述した『台湾教会公報全覽』という復刻版のほかに、近年、文献のデジタル化が急速に進んでおり、『台湾教会公報』は簡単にインターネットで検索・閲覧ができるようになった。これから、『台湾教会公報』に当たる読者や研究者に、台湾総督府の検閲などを念頭に入れるべきだ、と呼びかけたい。

2. 「ローマ字」について

従来の研究では「ローマ字」を習得することは、世界への窓が開かれることにあたると論じている。筆者はこの主張が植民地台湾における「ローマ字」を過大評価しているのではないかと指摘した。確かに、我々は英語がわかれば、書籍なりインターネットなりを通して、英語圏の世界にアクセスことができるようになるが、前提としてそれらのものが用意されていなければならない。そして、植民地台湾において、それらのものが用意されていなかった。「自主的」にしても、「非自主的」にしても、教会の傘下に入った「ローマ字」もはやくも挫折したのである。すなわち、「ローマ字」を通し、社会、ひいては世界にアクセスすることが、台湾総督府の政策によって、閉ざされたのである。さらに、日本教育を受けた台湾人の信者でも段々「ローマ字」が読めなくなってきたため、「ローマ字」で台湾人信者を教育するという教会の方針は最終的には、日本語に変更せざるを得なくなるだろう、とまで予測されていた。これは「ローマ字」の挫折・失敗の予告である。

第二章では次のことを論じた。

本章では日本人側における「ローマ字」をめぐる論争を扱った。これまで、日本と台湾とは、日本人と「ローマ字」は無関係のように思われてきているが、その裏ではその影響を受けていることを指摘した。日本人による台湾語のカナ表記も制定に至るまでには「ローマ字」から大いに影響を受け、「じつは教会ローマ字とも整合性を保っている」。だが、日本人による台湾語の漢字とカナ表記は、カナ表記の場合はそれほど日本人に馴染まなかったし、漢字を以って「有音無字」といわれる台湾語を表記する際にも難問にぶつかったため、領台期間中、「ローマ字」が想起されつづけた。つまり、「ローマ字」は表面的には無視されたように見えるが、その裏では日本人に多大な影響を与えており、そのカナ・漢字表記を脅かしていたのである。

本章で扱った五人の台湾語論者は一致して「ローマ字」を肯定的に評価し、それなりに受け入れていたが、「ローマ字」表記が音韻表記に有利だとするものの、漢字論、使用者の学力の問題やあるいはナショナリズムなどを考慮して、主張には濃淡があることが明らかになった。漢字の束縛が少ない岩崎敬太郎は「ローマ字」の綴り方を知らない学習者が多いため、やわらかに呼びかける。それに対し、東方孝義は積極的に「ローマ字」をアピールしていた。一方、小野西洲は台湾語の表記が日本語に準ずるべきと考えているため、「ローマ字」を抑制している。

また、台湾語特科の教科からみれば、「ローマ字」が組織的に台湾総督府の台湾語教育に導入されたり、現場の台湾語学習にも活用されたりしていた。教会以外の台湾人は「ローマ字」を軽視し、台湾（語）の文字にするどころか、知ろうともしなかった。だが、台湾語学習を必要としない台湾人と違って、台湾語を勉強かつ研究する台湾語学界は「ローマ字」を敬遠するどころか、積極的に受け入れようとする側面があった。日本人がどのように水面下で宣教師たちの業績を咀嚼かつ再生産したかを論じることで、日本領台時期における「ローマ字」のもう一つの側面を示したものである。領台時期の日本人と「ローマ字」は複雑に絡み合っていたのである。本章も「ローマ字」が「教会の外には普及しなかった」という従来の見方に挑戦しようとしたものである。

第三章では次のことを論じた。

本章では日本人が暗中模索した台湾語表記法の諸相に三つの面からアプローチした。台湾語奨励試験の内容変更を手がかりにして、日本人による表記法の使用状況の考察。全島警察官の台湾語講習の資料に供され台湾語雑誌『語苑』の編集方針などを通して、表記法が実質的に統一の方向に向かっていた点。そして、李尚霖が提起した基本的には平行（つまり、それぞれ独自に存在）している二つの「台湾話文」という状況を踏まえ、日本人の「台湾話文」が積極的に台湾人の「台湾話文」と関わりを持つようとしていたという点。つまり、日本人による台湾語表記法はもはや日本人の間にしか通用しない意思疎通の台湾語表記ではなく、被植民者がその思想をあらわしうる書き言葉としての台湾語を表記するものとなったことを論じた。

本論文では植民地期台湾における台湾語表記の諸相や問題を明らかにした。これもこれまでの台湾語表記の難しさを語っている。これに鑑み、これからの台湾語表記に期待を掛けたいのである。